



設計にあたっての基本姿勢

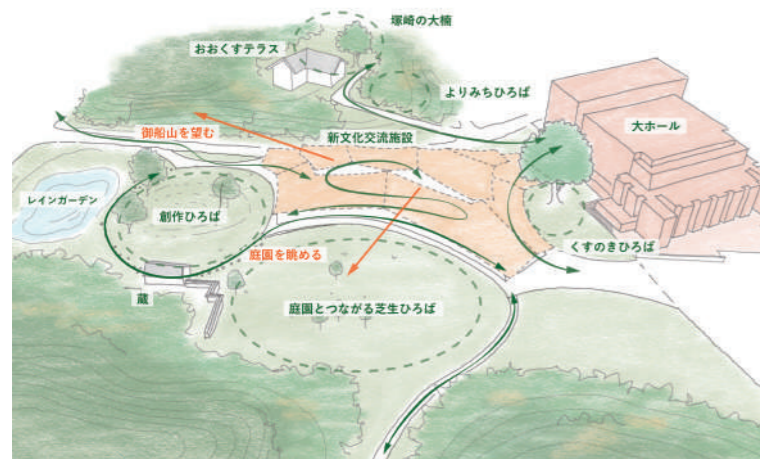
武雄市で培われてきた風景や地域資源を土台としつつ、枠にとらわれない新しい創造や出会いを生み出す、市民の皆さんの日常の拠点となる新文化交流施設エリアを目指します。

1. 既存の文化と新し文化が融合し、次世代を描く場
2. 枠にとらわれない「文化・アート」を創造する場
3. それぞれの居場所で新たな「つながり」= 交流を創造し、にぎわいを創出する広場

エリア全体コンセプト

庭園から建築へと、体験がつながる空間構成

新文化交流施設内も旧鍋島庭園や周囲の魅力的なランドスケープの一部としてとらえます。庭園をめぐるながら、歩みをすすめるごとに変化する風景を楽しむように、建物の内外にたくさんの居場所をつくり、敷地内外の文化エリアをつなぐ、まちなぎわいを創出する拠点を生み出します。



武雄のシンボルである御船山に呼応する屋根

ランドスケープデザインコンセプト

土地がもつ有形無形の流れを読み解きながら、流れの妨げとなっている淀みを改善し、唯一無二で、居心地よく長居したくなる場づくりを目指します。

これまでとこれからの文化をつなぐ

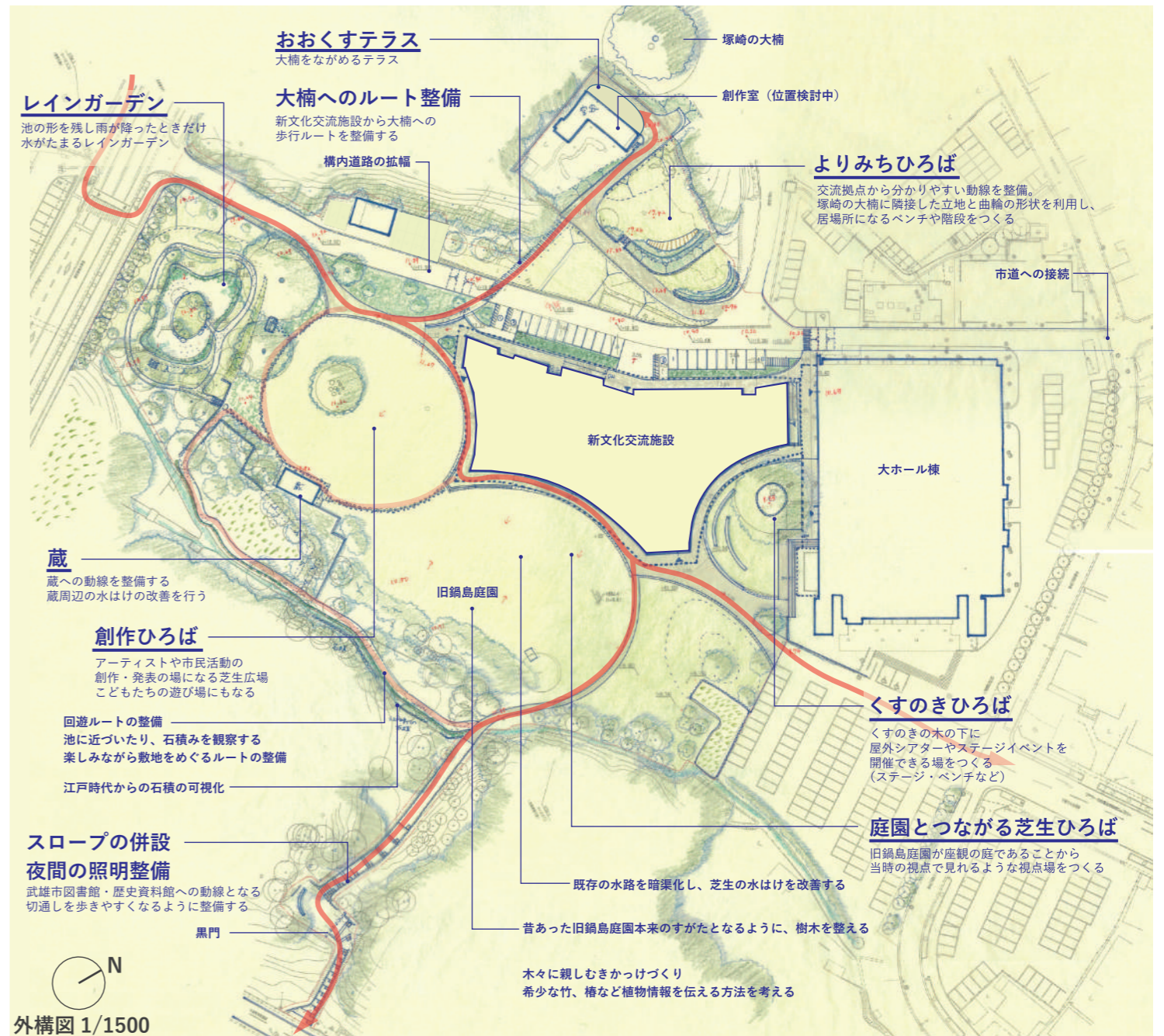
計画地には、旧鍋島邸であったことを物語る曲輪、黒門、蔵、庭園、石積や池などが残されています。それら昔からあるものを継承しながら、創作活動やイベントなど新しい文化を生み出すことができるような、文化の結び目となる場づくりを目指します。

よりみちしたくなるようなみちをつくる

文化会館の周囲には、塚崎の大楠、武雄神社、武雄市図書館・歴史資料館、高校などが集う施設があります。異なる目的を持った人々が行き交う動線を丁寧につなぎ合わせ、ベンチなどの滞留空間を各所に整備し、エリア一帯の回遊性を高めます。

水みちを整える

計画地は、御船山と武雄川の間位置し、豊かな自然環境に囲まれています。一方で、周囲から雨水が集まり、滞留しやすい状況が課題となっています。原因となる丘陵地の保水力を高める提案や淀みを生み出している水みちの改善を行い、自然環境を身近に感じ、楽しめるような場を目指します。



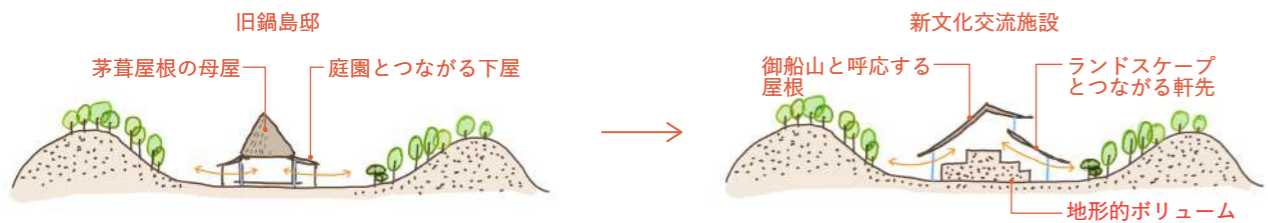
外構図 1/1500

設計コンセプト

旧鍋島邸を参照した空間構成

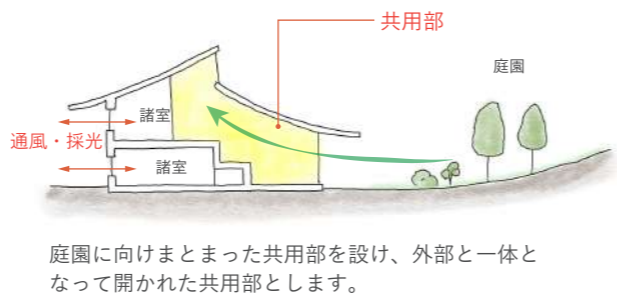
旧鍋島邸は茅葺屋根の母屋と庭園につながる下屋で構成されていました。新文化交流施設では御船山と呼応する屋根はこの母屋に、ランドスケープとつながる軒先はこの下屋に対応する構成です。

大地の延長としての地形的ボリュームと、御船山に呼応する特徴的な屋根を組み合わせ、周囲の風景とつながる居場所を生み出します。1階は長く深い庇によって、旧鍋島庭園の風景を美しく切り取ります。



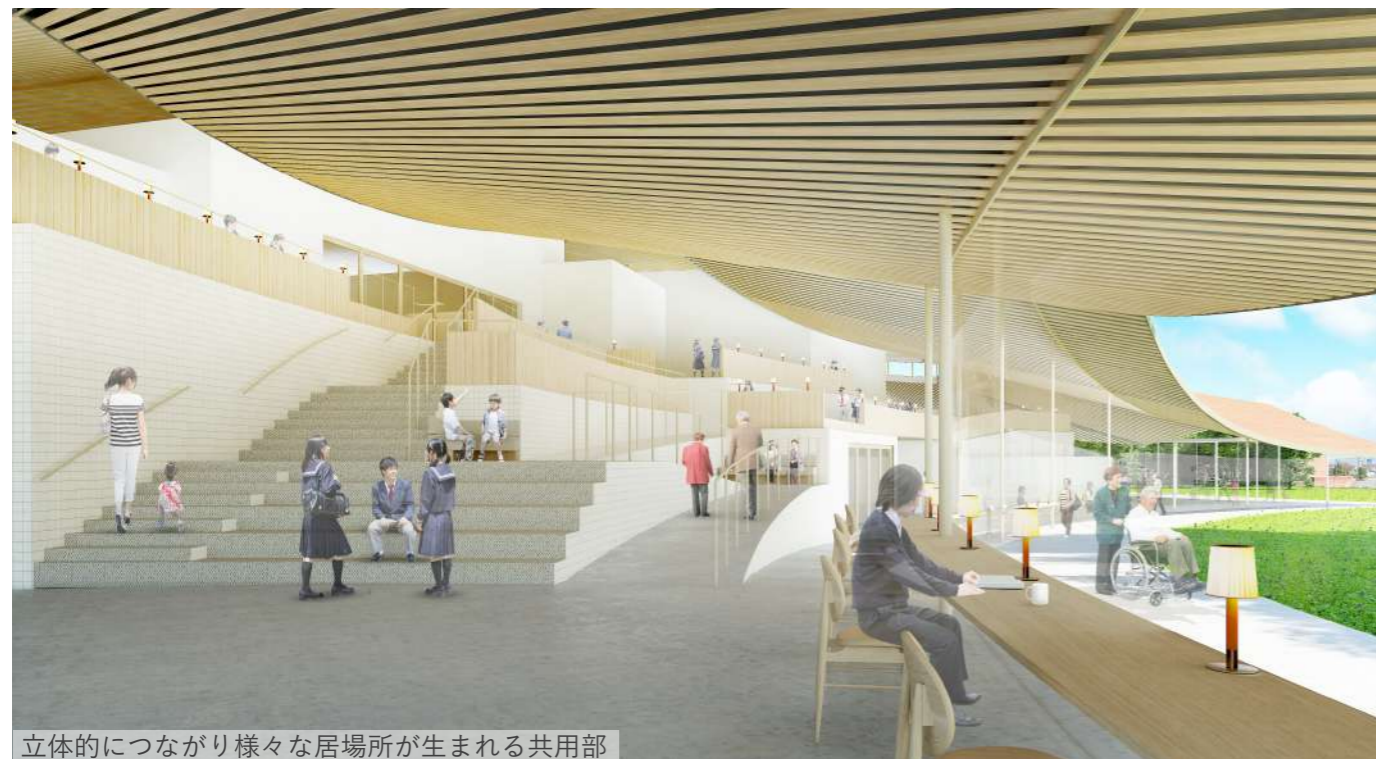
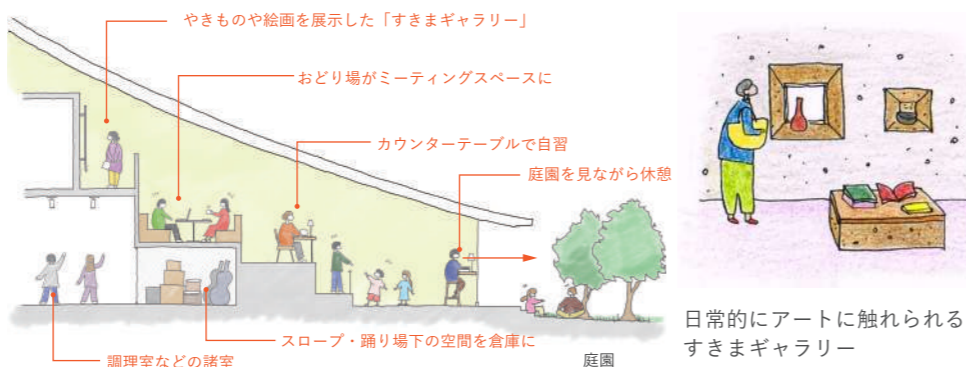
性格の異なる庭に向かって顔をつくる、明るく開かれた配置

旧鍋島庭園や楠、池など、性格の異なる豊かな周辺環境に向けて、それぞれ顔をつくる配置とします。開放的な共用部を庭園に面して配置することで、誰もが訪れたい明るく開かれた建築をつくります。



立体的につながる共用部で、多様な出会いと居場所が生まれる計画

庭に面する、階段状のダイナミックな共用部に様々な居場所を多数つくすることで、市民の皆様が日常的に訪れたい場が生まれます。また共用部を「すまぎギャラリー」と呼ばれる展示空間とし、自然とアートや市民活動の発表に触れられるようにします。



立体的につながり様々な居場所が生まれる共用部

平面計画

